

令和7年度卒業式 式辞

大雪に見舞われ、大変厳しかった冬も終わりに近づき、ようやく春の日差しを感じることができるようになりました。

本日、この良き日に、PTA 会長 生熊 武 様、振興会会長 酒井 春樹 様をはじめ、多くのご来賓や保護者の皆様のご臨席を賜り、第44回卒業式を挙げていただけますことは、私も教職員一同、何よりの喜びとするところです。

只今、卒業証書を授与されました301名の卒業生の皆さん。卒業おめでとうございます。卒業は本校の教育標語「**For the Best**」(最善を求めて)の精神に則り、皆さんが高校生活に全力で向き合ったことの成果です。これまでの皆さんの努力に敬意を表するとともに、心からお祝い申し上げます。

さて、本日は卒業生の皆さんを送り出すにあたり、皆さんがこれから幸せな人生を送ることを願い、幸福について考えてみたいと思います。

「幸福は、既に出来上がったものではない。それは、自分自身の行動から生まれるものである。」ダライ・ラマ14世の言葉です。幸福とは、運命として自然に授かるものではなく、日々の行動や心の持ち方の結果であることを表しています。また、ここでダライ・ラマ14世が指す行動には、自分のための行動だけではなく、他者のための行動が含まれています。利他的に生きていくことが、結果として自分自身の幸福を作り上げるということなのです。

ここで利他的に生きた人物の例を挙げます。リトアニアにおいて領事代理を務めた外交官である杉原千畝さんです。彼は第二次世界大戦中、難民たちに中立国である日本を通過し、第三国へと逃れるための「命のビザ」を発給し続けました。ただし、当時日本政府は杉原さんのビザ発給許可の申請を拒否したため、本国の命令に背いた独断での発給だったのです。処罰されるリスクを冒し、なぜ彼はビザを発給し続けたのか。それは目の前の命を見捨てられないという自分の利他の心を優先した結果でした。後年なぜ命令に背いたかと問われ、彼は「私のしたことは外交官としては間違っていたかもしれない。しかし、人間としては当然のことだった」と述べています。人間として正しいことを行なったという思いは、自己肯定感や自らへの誇りへと昇華し、幸福感につながりました。

終戦後、彼は外務省を依願退職しました。しかし、それは事実上の解雇に等しいものでした。傍から見ると不遇であった時代、彼は自分の功績を語ることもなく、静かに暮らしていました。30年程後に、彼は「命のビザ」で救われた生存者の一人と再会します。その際、「あなたが救ったのは私一人ではなく、私の家族、そしてその後に生まれた多くの子孫たちなのです。」と告げられます。この時杉原さんは、自分がいかに多くの人を救ったのかを改めて知ったのです。彼は晩年、「あの人たちが生きていてくれた。それだけで私の人生には悔いはない。」と語っています。この時の深いやすらぎは、充足感と幸福感につながりました。

幸福に決まった形はありません。皆さんは自分が思った形の幸せを追い求めればよいと

思います。しかし、利他的に生きた結果、幸福を感じた人がいたことを覚えておいてください。利他的であることによって、多くの人たちを幸せにし、自分自身も幸福になった人がいたことを覚えていてほしいのです。

皆さんに一つしてほしいことがあります。それはご家族の皆さんを始めとするこれまでお世話になった人たちに感謝の気持ちを伝えることです。感謝を伝えられた人たちは、きっと笑顔になることでしょう。その笑顔を見た皆さんも満ち足りた気持ちになるはずです。幸せの連鎖が生まれるのです。

結びになりますが、保護者の皆様方には、お子様が晴れの門出を迎えたことにお慶び申し上げますとともに、この間、本校の教育活動に、ご理解・ご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。学校といたしましても立派に成長した44期の卒業生を送り出すことを大きな誇りに思っています。卒業生の皆さんの人生に幸多からんことを祈念して第44回卒業式にあたっての式辞といたします。

令和8年3月1日

市立札幌平岸高等学校

校長 中井 勝広